

ナルニア国物語感想

クリスタル航 & あめのひかり



昨年3月に、完読してから、1年半。
毎晩読み聞かせ、3か月で2回目の完読となりました。

*ピンク字あめのひかり感想。

「ライオンと魔女」

「カスピアン王子の角笛」

これらについては、前回は映画で見たきりでしたので、読むのは初めてとなりました。映画にないシーンなどもあり、とても新鮮な驚きもあったようですが、特に航はコメントせず、「えー」とか、「へ

一」とか言うのみで、夢中で黙って聞いていました。

「朝びらき丸東の海へ」

ここからは本は2回目となります。映画にもなっており、映画館に見に行き、航の大好きなリーピチーブが出てくるこの物語は、7巻中で、航が一番好きなお話です。(今聞いたら、2番になったそうです。)しかし、細かいストーリーは覚えていないので、新鮮な感じで聞いています。

一回目と同じく、「死水島」(黄金に変わる島)がやはり怖かったようで、「飛ばして！！」と言いましたが、6歳時よりは、強くなって、一生懸命聞いていました。そして、ユースチスが龍になったあたりも好きで、リーピチーブと仲が良くなったり、いい子になったり…。

航「こんな経験をしたら、そうなるよね。ある意味、リーピチーブの次に、ユースチスが、一番すごい経験をしているよね！！」
ラストのシーンは、最後まで読んだからこそ、良くわかるものもありました。一回目の時は、リーピチーブが出てこなくなるのが寂

しそうで、アスランの国が、この時点では、どのようなところか、掴み切れていなかったの、今一つわからない感じもありましたが、今回は、アスランの国が、うっすらと覚えており分かっているの、

また、違った印象のようで、

航「みんなより先に行くんだよね。リーピチープが一番乗りなのは どうしてだろう？なぜ、カスピアンは行きたいのに、いけないの？

でも、最後にみんな一緒になるんだよね」

あめ「リーピチープはもう、ナルニアに未練や執着がないからだね。そして、だれよりも、アスランの国に行くことを強く望んでいたから なんだね。・・・つまり、一番、準備ができていたってことかなあ？ カスピアンは王としての責任を果たしてから、来なさい、というこ

となんだね」

航「キーキーチークがいるから、ネズミたち大丈夫だしね^^」

*読み始めて気が付きましたが、1回目では、そのまま理解しているつもりで流していたところが、新鮮な響きとなり、胸の奥へ入ってくることでした。

「銀のいす」

読み始めて驚いたのは、“泥足にがえもん”がこんなキャラクターだったかなあ？と二人で驚いたことです。残っている印象は、なんでもネガティブにとらえる、みんなをイライラさせるキャラだったのですが、「しるべの言葉」に一番忠実であろうとしたのは、
泥足にがえもんのように感じました。

航&あめのひかり「泥足にがえもん、えらいねー！」

という場面がいくつもありました。行ってみれば、2人の子ども達よりも、「目覚めて」いるのかもしれない。

航「銀のイス、僕が剣でぶったぎる——！！」

と興奮の航。

最後のしるべの言葉を逃さずに、ほっとしたようで

航「ぎりぎりだよ……よかったね。僕だったら、忘れないように手
に書いておくのに。」

アスランの国で、年老いたカスピアンが登場シーン。

あめ「どうしてかわかる？」

航「わかるよ。ここはアスランの国だからでしょ。」

最後、いじめっ子たちを震え上がらせるシーンは
相変わらず笑っていました。校長先生も変わってよかったと言っ
ていました。

「馬と少年」

何と、今聞きましたら、こちらが一番好きだそうです。

シャスタにとっても共感していました。

どこが好きか聞いても「ただ好きだから」とのことでした。^^

これは、ストーリーで見ると、「ソドンヨ」などと似ていますね^^

「魔術師のおい」

白い魔女が復活する場面はやはり怖いらしく、
「飛ばして！！」と言いました。が、そのまま読み進めました。

アンドルー叔父の身勝手に、滑稽なところ、最後は動物たちに愛され可愛がられるところは、前回と同じく大笑いでした。
ナルニアの動物たちは、本当に航のエネルギーとぴったりくるようです。

「あいだの林」について

あめ「これは、パラレルワールドの入り口みたいなものだね。」
航「違うよ！！パラレルワールドは、自分が選ばなかった違う自分の現実のことでしょ！これは全く違う世界に行く、世界と世界の狭間なの！！」

あめ「あ！そっかー……。すごいね、航。その通りだね！」

「リンゴのある、果樹園」でのこと

ディゴリーが、空腹と渇きに堪え、魔女の誘いの言葉を振り切って、みんなと逃げるところ。

あめ「すごいね。ディゴリー。本当に偉いね。大人でも難しいと思うなあ。航は同じ場面だったらどうする？」

航「僕は、一個だけ取って持って、噴水の水をおなかがいっぱいになるまで、がぶがぶ飲んで、魔女に捕まる前に、“バカヤローあつちへいけ！”って、走って逃げる！！」

あめ「そうだけど、とっても難しいよね。一個だけって、我慢できる？」

航「うん。アスランと約束したら、絶対に守る！！」

あめ「そっか。航も偉いね。^^」

お母さんが良くなるか、とっても心配していて、

航「なぜ、アスランはお母さんを助けてあげないの？」

あめ「助けると思うよ。でもその前に、ディゴリーが学ぶことが必要だったんだろうね。」

そして、アスランにリンゴを届けたところで、魔女の誘惑でリンゴを盗みそうになったことを告白するシーン。ディゴリーは死よりも恐ろしいものがあることを知ります。

航「僕も、それがいい。みんながいないのに、自分だけ生きていきたくない。自分の寿命だけ、精いっぱい生れたらいい。」

今回、馬車屋さんの、場面場面での言葉が、本当に純粹で、信心深く、王になるにふさわしい方だと、特に印象に残ったようです。ナルニアが生まれるシーンで、人により、見えるもの、聞こえることが違って、今は見ることに、聞くことが大事とあって、一番、中今に集中しているのは、馬車屋さんでした。このことについても航と話しますが、それは、最後の戦いの小人たちの場面でも同様です。

*読み聞かせながら、そのエネルギーに包まれ、幸福感でいっぱい涙があふれたか所があります。

P248。

アスランが話しているあいだ、子供たちがある体験をします。最高、幸福感につつまれ、これまで、自分達が知っていたものは、本物ではなかったと感ずるのです。

そして、この経験があれば、これからのどんなことも
「まあ、いいか」というように感じられるという内容です。

これは航の感想ではありませんが、
この瞬間、エネルギーで、
航と私も、この黄金の海、「光の海」を漂いました。
そして、この文章の一言一句、
ディゴリーとポリーが感じたように、感じられ、
すべてを理解したように感じました。
涙があふれ、その後、
もう一度、航に私が感じたことを伝えて、読み聞かせました。
航の地上セルフ的には、「次読んで！！」でしたが、^^；
エネルギーでは、あの瞬間を一緒に体感していたと感じました。

「さいごの戦い」

前作の幸福感から一転……ヨコシマの嫌なエネルギーで進むの
で、航と「これ嫌だねー、ここ読みたくないねー」と言いながら、ヨ

コシマに対して怒っていました。^^

そんな調子で、厩の扉をくぐる直前までできました。

ユースチスとジルが幼いながら、死を覚悟して、ナルニアの為に戦うことを決めた場面は、二人で感心しました。

航「僕もそこにいたら、一緒に戦うよ！！」

扉の内側は、その人によって、見えるもの、聞こえるものが、違っていることを、航はきちんと、理解していました。

航「ここは、その人が信じていることが、現れてくる世界なんだね。小人はいつになったら、新しいナルニアに気がつくんだろう？」

そのあと、みんなで、新しいナルニアへ、もっと高く！もっと奥へ！！走ります。ここでは、ユニコーンの“たから石”が一番、中今を理解して、導き手になっているので、「やっぱりユニコーンは一番純粹だからだよね・・・」と話していました。

航にとっては、犬たちの存在がとっても愛おしかったようです。

私は、犬や、ものいう動物たちは、航のようだと感じました^^

***また、涙がにじむシーンがありました。**

P248～251の滝登りの場面。水が光のようになり、体が軽くなって、どこまでも加速していくところ。

私たちもいっしょに昇っているようでした。

理由はよくわかりませんが、ここも涙があとからあとから溢れてきました。まるで、どこまでも加速していく、アセンションの上昇の瞬間エネルギーのようだからなのかもしれません。

最後に、子ども達にアスランが重要なことを伝える場面。

一度目の昨年3月の時は、「死」という概念が、航には恐ろしく感じられるかもしれないと思い、この部分はフォーカスしませんでした。そして、今回、航は

航「そうなんだね。みんな、お父さんもお母さんも、一緒にだったんだね。スーザンだけが、違ったんだね。」

あめ「そうだね。スーザンは、まだ、勉強することがたくさんあるのかもしれないね。おばあさんになって、新しいナルニアでみんなと

一緒になれるといいね」

航「いや。スーザンはなれないと思う。死んでも新ナルニアには来ないで、他のところに行くよ。仕分けの時に、別のところに行った人と同じところ。」

と言いました。

あめ「新しいナルニアには、たくさんの仲間がいるけれど、みんな、ともに、いろいろな場面を乗り越えてきた、同志だもんね。」

航「うん。大切な人ばかりが集まっているんだね。」

航が言い切ったときに、あら、スーザンかわいそう・・・と思いましたが、今、これを書きながら、これは差別ではなく、区別なのかな、と感じました。

あめ「みんな、ナルニアを卒業したんだね」

航「うん。そして、大好きな人たちと、新ナルニアへ来たんだね。

僕ここ行きたい！！」

あめ「行けるよ。みんなと、今、それを創っているんだよ。」

この本は、多次元構造になっているのを、今回すごく感じました。

おわり

航&あめのひかり

Ai先生コメント

あめのひかりさん、航くん、素晴らしいですね！！＊^^＊///

まさに親子での、ナルニアのMAXの体験の旅ですね！！

そして航くんが、とても成長し、MAXで内容を理解して

楽しみ、素晴らしい学びとなっているのが、とても伝わってきます。

